(日刊) 新潟日報 第3種郵便物認可

「つながり」育つ人と街

学生にとって、地域のコミュニティー（共同体）というのは縁遠い存在だ。身近な「コミュニティー」といえばサークルか、インターネットの仲間づくりサイトのようなものだ。でも、私たちが実際に暮らしている新潟では、地域のつながりを育てようとさまざまな取り組みが行われている。そこで何が生まれようとしているのか、何が課題となっているのか。新潟市を舞台に、足を運び考えた。

（新潟大学・地域コミュニティー取材班）

新潟大・新潟日報共同企画

（下）

新潟大学と新潟日報社は共同企画として学生による新聞作りを行っています。同大副専攻制度の一環「メディアリテラシー」の授業に位置づけられ、学生自らが企画、取材、執筆に当たっているものです。本年度は11人が参加、2班に分かれ「地域づくりとアート」（7月24日掲載）と、「地域コミュニティー」をテーマに取り上げました。

地域コミュニティーのいま（新潟）

赤塚地区

豊かな自然を残す水辺の空間、歴史を刻む建物。そうした、地域の財産を大切にし活用しようという活動が盛んで、暮らす人々の間に新たなつながりをつくり上げている地域がある。新潟市西区赤塚だ。

赤塚地区のシンボルである佐潟は1996年、ラムサール条約湿地に登録された。潟は、かつて、水源、漁場として暮らしとともにあった。この潟の価値を、地域の活力源として見直そうと、2002年、住民は「佐潟と歩む赤塚の会」を結成した。

6月の休日、会のメンバーが、潟のほとりで草刈りをしていた。この場所には、かつて田んぼがあった。潟の泥をさらって田んぼに入れるなど、潟に人の手が入ることで多様な生物環境が保たれていた。

減反政策などで離れてしまった潟と地域の距離を少しでも縮めたいという思いが、この作業には込められている。

同会は、他にも虫捕りや野鳥観察、ウナギ捕りといった佐潟の自然を生かしたイベントも開催している。代表の浦井晴之さん（48）は、「団地も増え、佐潟をあまり知らない子どもも多い。イベントを通じ、楽しみながら地域の良さを知ってもらいたい」と話す。

作業が一段落したころ、佐潟で取れたハスの葉と実が入ったおにぎりの差し入れがあった。差し入れたのは、地元の主婦グループ「佐潟村」のメンバーだ。毎週末、赤塚商工会館前のテントで、地元で取れた野菜を直売している。

メンバーの丹羽礼子さん（64）は、「お客さんはほとんど常連。みんなの顔を見て買っていく」と話す。人と人のつながりが財産なのだ。

「歩む会」のメンバーも、もちろんお得意さま。ほとんど身内のようなものだ。佐潟の幸を生かし、たおにぎりも、そのつくり方を、地元で何とかしていこう」と会を設立した。

6月に行われた庭の清掃には約30人が参加、汗を流した。森のような竹やぶも含む庭は、ちょっとした学校の校庭ほどある。副会長の斎藤敏夫さん（69）は、「ここをどうするかという共通の話題で、若い人と年配の人が話ができるようになった」という。

歴史的建造物の保存活動は新潟市でも多いが、赤塚の人たちは行政にだけ頼らず、まず自分たちが体を動かす。

住民にとって身近な宝を守り、活かす活動を通じ、お互いのきずなという大きな力が根付こうとしている。赤塚は、自然と人、人と人の心が通い合うまちだ。

（人文学部4年・三沢一志）

ヨシが生い茂った佐潟のほとりで、草刈りに励む「佐潟と歩む赤塚の会」のメンバー

きずな深める身近な宝

「豪農の館」中原邸の清掃活動。30人ほどが約2時間、落ち葉拾いや竹刈りに汗を流した

中原邸は、当主の中原堯之さん（69）だけでは維持していくことが難しくなっていた。

そこで、中原さんの同級生や地域の郷土史を研究しているメンバー「歩む会」の有志らが中心となり「地元の宝を、地元で何

「うちの実家」

自然なやすらぎの空間

新潟市東区粟山の住宅街に溶け込むように「うちの実家」はある。ごく普通の民家だ。ここに来る人たちは、何か特定の目的があって集まっているわけではない。暮らしている場所や、年代もさまざまだ。でもそこには、穏やかなつながり、支え合いがある。これも一つのコミュニティーの姿だ。

「実家」がオープンしたのは、2004年。創設の中心だった河田珪子さん（65）は1990年、介護の手助けが必要な人と、手助けする余裕のある人がそれぞれ登録し、お互いに助け合う「まごころヘルプ」という、有償ボランティアの仕組みを新潟市につくった。

その活動の中で河田さんは、介護だけでなく、孤独なお年寄りが気軽に楽しく話せる場所、心のやすらぐ場所の必要性を感じた。

そして97年に始めたのが「地域の茶の間」の活動だ。定期的にお年寄りらが集まり、自宅の茶の間にいるような気楽な気持ちで何をするともなく過ごせる場所を身近な地域につくっていく。

この活動はいまは県内外に広がっている。そして、月に数度の決まった日だけでなく、「いつ行っても無条件で温かく迎えてくれる」という張り紙がある。こちらも互いに気を使うこともないが、自分から声を掛けると、みんな笑顔で応えてくれる。お客様に誰かと話せる場所（河田さん）として開かれたのが「うちの実家」だ。

入り口には「どなたがいらしても『あの人だれ？』という目で見ない」を掲げた70代の女性は、脳出血で右手が使えなくなったこともあったが、ここへ通ううちに、左手で水彩画を描くことが楽しみになったと話してくれた。

言葉はまだうまくは出ないが、明るく笑い、積極的に話す姿が印象的だ。

利用者は高齢の人が多いが、中には子連れのお母さんや、若い人も来る。話しやすい雰囲気を味わっている様子の人もいる。

自由だからこその、居心地の良さがあるのだろう。電動車いすで1時間以上かけて来る人も

いる。遠方の人のため、泊まれる準備も整っている。

「うちの実家」は「誰でも好きな時に来て、好きなことをすればいい」という場所だ。会話を楽しむ人、ゆっくりとオセロで競い合う人、縫い物をする人。一人でただ、

「地域の茶の間」が集まる「うちの実家」

自然な空気の中で時間が流れる「うちの実家」

だ。「自分でできることは自分でやる」という気持ちはこの女性だけでなくどの人からも伝わってくる。

自然な助け合いと自立の精神が、格好良く感じられた。それはコミュニティーと呼ばれるさまざまな取り組みに共通して求められる精神なのかもしれない。

◇　◇

うちの実家は基本的に週に4日間開かれている。詳しい問い合わせは025（277）9398。

（人文学部4年・桑名優樹）

取材を終えて

内容の取捨選択必要

自分が記事を書けるのか心配だった。だが、取材を終えると、制限字数に収まらないほど書いていた。それは、松浜で出会った人々にとても心動かされたから。けれど、分かりやすく伝えるには内容の取捨選択が必要で、取材をしても、記事になるのはほんの一部だと知った。毎日見る新聞の裏にも、記者のさまざまな体験が隠れているのだろうと思った。

（椎野）

自分を変える転機に

最初「地域コミュニティー」という大きすぎるテーマに、どうすればいいか不安を感じていた。だが、取材をしに地域へ行ってみると、見知らぬ私を温かく迎えてくれ、不安は消えた。このぬくもりこそ、今求められていることなのではないかと感じた。新聞作りを通し、さまざまな意味で自分を変えられたとも思っている。

（大須賀）

文章の難しさに直面

赤塚地域の住民活動にはいつも笑顔があり、取材に行くたびに元気をもらうことができた。この取材を通じて、地域での人と人のつながりの大切さを実感することができたが、その一方で、それを文章で伝えることの難しさにも直面した。この記事を読んだ人が、住民同士の強いきずなが生まれている赤塚の様子を、少しでも感じてくれればうれしい。

（三沢）

人と会う貴重な経験

これまでの生活の中で、地域のコミュニティーを意識することは少なかった。しかし、取材を通して、新潟にも多くの独特なコミュニティーがあること、またそのコミュニティーが活気にあふれていることを知った。初対面の方と話すのは緊張したが、取材を通して人と人のつながりや、地域の結束力を知ることができたのは貴重な経験だった。

（桑名）

求められる要素実感

新聞作りに参加する以前から、公民館での活動に参加していたこともあり、コミュニティーの大切さを実感していた。コミュニティーと一言で言っても、さまざまな形がある。だからこそ定義づけることは難しい。私は今回の取材を通して、「自分が自分らしくいられる場所」それこそがコミュニティーに求められる要素なのかもしれないと感じた。

（広川）

伝える楽しさ感じた

コミュニティーやそれにかかわる人たちはパワーがあふれていて、とても輝いて感じられた。私が取材した、新潟大の寺尾先生も小須戸について話してくださったとき、同じように、すてきな笑顔を見せていた。そうした輝きを言葉で表現し、記事にする難しさも感じた。けれども、伝える楽しさもまた感じることができ、いい経験になったと思う。

（今古賀）